

# 「女性学のすすめ」

——上野千鶴子氏講演会記録——

女性学という名のついた研究機関が日本にいくつあるかご存知ですか。日本には二つしかなくて、その一つがこの神戸女学院にあります。ところが研究所はあるが講座はない。これは進んでいるのか遅れているのかわからないですね。平安女学院でさえあるのですから、女性学講座はぜひおつくりいただきたいと思います。

私の勤める平安女学院では、四年間闘いつづけて昨年ようやく女性学総合講座を開講しました。一年後、学生たちに感想を書いてもらいましたが、その反応は大きく分けると次の二つです。このような女性学をもっとはやく中学、高校でやっていれば、進路選択も変わったであろうということです。「しょせん女」「どうせ女」という気持ちが、すでに18才のみぎりにはすっかり内面化されているのですね。

第二に、このような話をぜひ男の子に聞かせてほしいと言うのです。ある意味で女の問題は女は実感としてわかるので、女子学生は言えばストーンとわかってくれる。これを言語圏の違う男に伝えようとすれば大変難しい。学生だけでなく、主婦や企業の女子社員も同様に、同じ話を男性に聞かせてほしいと言います。

しかしどちらかというと、女性学を主婦の人たちに話す方がよくわかってもらえる。結婚妄想症候群にかかっている女の子たちには、結婚生活がどんなものか現実に直面するまでわからない。しかしこれも時間の問題、どうぞ一度味わってから女性学を聞きに来て下さいと言っています。女子学生たちは共かせぎの主婦についてこういいます。「何が悲しいて結婚してまで働かんらんねん」と。しかし目をあけて身近かなサンプル（両親）を見れば、何が現実か、

結婚生活の20年後のモデルが見えるはず。現実がどういうものか結婚妄想症候群にかかっている女子学生に言い聞かせても、ほとんど徒労です。平安の学生のことだけを言ってると思わないで下さい。あなたたちも入ってるのですから。

また先ほど女の問題は女がよくわかると言いましたが、今は男が女性学を勉強しなければならない時代です。最近では公民館の婦人問題講座でも男が多数来ています。私が教えに行っている関大でも、女性論総合講座に男性が半数以上来ていますね。今や女性学の、「女が女のためにやる学問」という定義がくずれつつあります。女の問題はウラ側にある男の問題でもあります。つまり女性学は、女と男の関係の問題、あるいは女と男の関係を一定のあり方で生み出す社会のしくみを問題ととらえます。

女性学という言葉以前に「婦人問題」という言葉がありましたが、最近では評判が悪い。なぜかと言うと、まず第一に、「不良」や「非行」という言葉のように、「婦人」には反対語がない。殿方でもないし、紳士でもない。反対語がない言葉の共通点を見ると、名前をつけるまでもなく当たり前とされている集団があって、そこからはみ出した人たちだけに名前をつけているらしいということがわかります。「婦人」の反対はどうやら「人間」らしい。そうすると「婦人」は「人間」ではないのですね。

私は子供を「人間以前」と呼んでいます。文化人類学からみると、一人前になる前に子供が死んだら葬式もやらない社会があります。子供は一人前と見られていないからです。これに対して、老人は人間を退役した存在、「人間以後」ということになります。何も私が老人差別をしているわけではありません。日本の政府は15～65才を生産年令人口と勝手に決めて呼んでいます。老人は一人前の人間の中に入れてもらっていないのです。

また大人が全部「人間」かという「女」は入っていない。「社会は人間から成り立つ」と言う時、近代産業社会で人間とは(1)成人、(2)男子かつ、(3)使いものになる健康な男のことです。したがって女は「人間以外」となります。ところが子供はやがて大人になるし、大人はやがて老人になる。しかし男は女

になる気づかいはありません。だから安心して男は女を差別できるのですね。

第二にどうして婦人という言葉が評判が悪いかというと、「婦人」の「婦」という字は女へんに帚（ほうき）と書きます。どうやら女はもともと家にいて家事を担当するものというところから来ているらしい。

以上の二点から、女を「婦人」と呼ぶのはけしからんというので、「婦人差別撤廃条約（WOMEN を婦人と訳した）」を総理府は昨年「婦人」から「女子」と改訳しました。なんで「女性」としないのでしょうか。ここでも女・子供と一緒にされて考えられています。

またこれまで「婦人問題」という研究分野がありました。これは「婦人が問題だ」、あるいは「問題をもった婦人」というニュアンスがあります。このあと「問題」が消えて「婦人論」となりました。この変化は、当り前の生活をやっているはずの女が、構造的に一定のゆがみの中にいると考えることから来ています。

「女性問題」という言葉も私はあまり好きではありません。女性が問題ではなくて、女性が問題になるような、または女性を問題にするような世の中のしくみ全体が問題だというように、問題のたて方を完全にひっくり返したいのです。「女性学」という言葉は英語の Women's Studies から来ています。これは井上輝子さんによってはじめて訳されたものです。Women's Studies をそのまま訳すと「女性研究」です。これを女性研究としないで女性学としたことには、それなりの思い入れがあります。私はそれに大変共感をもちます。

Women's Studies と似たものでアメリカには Black Studies, Asian Studies, Area Studies という学問があります。私は Women's Studies と Area Studies は同じではないと思っています。なぜなら Area Studies はある対象をすでにある学問の道具で様々に切っていくというものです。女性学もこれでいいかというそうではない。たんなる女性研究なら過去にもあったのです。

女性学の研究者が最初めざしたのとは、既存の学問の対象に女性も含めるということでした。ところで女性学の初期の中心テーマは主婦研究でしたが、

私は主婦は暗黒大陸だともっています。暗黒大陸というと差別用語ですが、これはシャドウという意味で、そこにあるけど見えない膨大に広がるものということです。すべての女は結婚して主婦になることが当たり前で幸せな姿と考えられています、そう考えられていること自体が問題だというわけです。女性学にはこの問題のくみかえ、パラダイム転換ということが不可欠なのです。

こういった意味で、対象を拡大するだけでは女性学にはなりません。方法（問題のたて方）をひっくり返さないとだめです。井上輝子さんによると女性学は「女性の、女性による、女性のための学問」と定義づけられていますが、女が女について研究するだけで女性学になるかという、そうではありません。たとえばフロイトの高弟ヘレーネ・ドイッチェという女性が「女性心理」というすぐれた本を著わしていますが、その中で「女とは核心において受動的なものである」と言っています。男性的な見方を内面化した女性は、男が女について言うことをくり返すに終るのです。

女性学をやるためには、自分が身につけて来た常識や思い込みをくずしていくプロセスが必要です。私はこれを「常識はずし」「思い込みくずし」と言っています。皆が常識だと思っていることを非常識だと言っていく。そこで私は「今日の非常識は明日の常識」という標語をつくりました。

非常識なことは色々ありますが、中曽根さんは「天皇陛下は国の元首である」という今の民主主義の日本では非常識なことを言っていらっしゃるようです。彼の非常識とわたしの言う非常識を一緒にしてもらおうと困るので、どこが違うか。彼の非常識は時代に逆らっているアナクロニズムです。私の非常識は時代が味方している、歴史的必然性があると思うから言っているのです。

近代の常識でも前近代では非常識なものはいっぱいあります。たとえば家にいて家事と育児だけをやっている主婦の暮らしは、前近代では常識だったのでしょうか。このような専業主婦の暮らしを百姓の妻がやれば、皆から白い目で見られます。こんな非常識なことはありません。今常識と考えられていることは、歴史上のある時点で始まったに違いない。したがって始まりがあれば、終わりが

あるに違いないと考えます。

現在、フェミニストと呼ばれる人々の最大の闘いのまとは、性別役割分業の解消という今日では非常識と考えられることです。この考えに反対する人は多くいます。男性の多くは既得権を失いたくないので、これを言うともあまりいい顔をしません。女性の中でも、長谷川三千子さんという人は、男女雇用機会均等法に文化の生態系を守るという立場から反対したアンチ・フェミニストです。

アメリカでも日本でも、女性解放運動に一番反対したのは女性たちでした。だから女性学が女だったらできるという楽観的な考えは持ちませんし、反対に男性でも男性中心的なパラダイムの転換という視点が持てるなら女性学を実践できます。

アンチ・フェミニストに会うと、私は相手を説得しようとして来ました。けれど最近ではもうやめました。歴史が私の味方についている、別にがんばらなくてもいいと思うようになったからです。時代おくれの性差別者は、遅かれ早かれ歴史の中で淘汰されていくでしょう。というわけで「今日の非常識は明日の常識」という標語で若干元気がでている今日この頃です。

### — 質疑応答 —

1. 今カルチャーセンターとか第3期における女性の学習する時代だと言われていますがどう思われますか。

簡単にいうと、私はおばん保育園だという皮肉な見方をしています。というのは、あれだけ女達が勉強し学んでも自分を表現する場がどこにもないからです。人間はものをインプットばかりするとおかしくなります。ある程度たまると出したくなる、これが健全なバランスです。そういう意味で、女が自己表現できる場所を保証しないで、いたずらに自己満足の時間を与えているということで、私はそれをおばん保育園と呼ばざるをえない。

この社会は男向けの社会（公＝仕事）と、女向けの社会（私＝家庭）とに分

離されています。公と私の世界を行き来するのは男だけで、女たちはずっと私の世界にいました。女のいる世界は血縁・地縁の社会で、男は社縁をつくりました。ところがこんなに子供の数の少ない時代に血縁の中味って何ですか。また地縁といっても都会に求めるのはむずかしい。あればうっとおしいでしょう、本当はそこから逃げて来たのだから。血縁も地縁も切れた主婦の生活がかかえる不満は、主婦の労働が評価されていないという憤りだけではなく、なんといっても孤立なのです。公の世界に入れてもらえず、地縁、血縁を失った中で、核家族の妻の孤立・孤独が今の主婦症候群の原因です。カルチャーブームというのは、大新聞が経営しているカルチャーセンターをはやらしたいからついつい大きくとりあげているのであって、あんなものだけが女たちのやっていることではないですよ。

公民館・婦人学級・PTA・地域運動・生協・ボランティアと手づくりで色々な運動をやっています。これらについては、私はおばん保育園とからかう気はありません。私はこれを選択縁とか女縁と言っています。血縁・地縁の強いところではこんな活動はできないし、必要ありません。転勤族の妻で根ナシ草になった女たちが、落ち込んだタコつばからやっとの思いで這い出して作ったのが女縁です。

昔は娘宿という女の集りがありましたが、私はこれらを「おばん宿」と呼んでいます。これがあるせいで沢山の女たちが救われている。ほとんど相互セラピーの役割を果たしている例が多くあり、今私はこれらをフィールドワークしています。

## 2. 男性が女性学や女性解放運動をすることについて

男の人にも女性学ができますかとよく聞かれるのですがこう答えています。「女性学や女性解放運動をやる前にあなた方にしかできない事があります。男性解放運動です。それをやっていれば忙しくて女性解放運動など手伝う暇はないはずです。」ところがついにこういう事を言う男性がぼつぼつ現れて来ました。渡辺恒夫さんの「脱男性の時代」(勁草書房)には、男たちがどんなに抑

圧をうけ、それから逃がれたがっているか書かれています。

3. 結婚形態が変わっていく中で、今まで女性が犠牲になっていたが、今後シワヨセはどこへ行くのか。

女が解放されれば結婚しなくなり、単身者が増えるという考え方は誤解です。女は家族の犠牲にはなって来たが、一度も家族がきらいだったことはありません。家族を解体して一人一人になろうというのではなく、女が抑圧を受けないような家族に作りかえようというのです。

解体家族と家族解体とは違います。解体家族は解体しても家族です。つまり今のような固定的な役割を解体したあとでも、なおつながっているような家族を解体家族といいます。私は解体家族を非常にいい家族だと思っています。村瀬春樹さんの「怪傑！ハウスハズバンド」には彼のやっている解体家族の実践例が書かれてあるので、一度読んでみて下さい。

4. 上野先生は結婚していらっしゃいますか。というのは、今のようなお話を聞いて、本当にその人が実践しているかどうか疑問を持つことがあるので。

よく結婚しているかどうか聞かれますが、この質問には女性差別のニュアンスを感じますね。というのはふつう男には聞かないからです。でも理念を実践しているか、というご質問でしたらお答えします。私にはつれあいがおりますが、法的には結婚していません。男ざらいがリブだと思われるようですが、私はちがいます。私は、男性といい関係をもちたいためにこそ、フェミニズムをやっています。

## Summary

# Introduction to Women's Studies

Lecture by Chizuko Ueno

In Japan, there are a number of names for the studies on women carried out before Women's Studies (*joseigaku*) appeared. These include studies on problems of "ladies" (*fujinmondai*), studies on problems of women in general (*joseimondai*), and studies on women (*joseikenkyū*). What is the difference between these three types of studies of women and Women's Studies (*joseigaku*)? Because of the discriminatory nature of the term "ladies," feminists do not like to use it. Secondly, studies on problems of women gives the impression of dealing with women who have problems without questioning the society which put women into such situations. Unlike other studies on women, Women's Studies does question whether the perspective in a given study is free from the influence of the male-dominant culture. This is how Women's Studies differs from studies on women.

The definition of Women's Studies given by Teruko Inoue as the discipline "for and by and of" women is not quite right, although I admire her Japanese translation of Women's Studies which is *joseigaku*, not *joseikenkyū*. The distinction between these three previous types of studies on women and Women's Studies is not only the inclusion of women as the object of study, although it is often thought to be this, but the perspectives which are taken for granted in pre-Women's Studies research, namely the assumption that all women should be housewives and they will be happy. We may find many studies on women done by women from men's views which they internalized. We have to keep in mind that if one can hold a shifted perspective on men and women, she (or he) certainly can do Women's Studies.

(Summerized by the Institute)